



Title	地域創生を再考する：自然との関わりにおいて
Author(s)	河森, 正人
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2022, 48, p. 109-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86864
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地域創生を再考する

—自然との関わりにおいて—

河 森 正 人

目 次

はじめに

1. 都市と自然
2. 風土と自然
3. 自然は失われたか
4. 風土性のなかの自然
5. あらためて地域創生と自然について

地域創生を再考する —自然との関わりにおいて—

河 森 正 人

はじめに

本稿の目的は、今なぜ地域創生なのか、そもそも地域創生とは何なのか、という点について本質的な問いかけをすることである。地域創生を考える出発点としては、おおまかにいって2つのアプローチがあるだろう。まずは人口・経済活動の東京一極集中とそれともなう地方の縮小社会化への政策的・実践的対応である。具体的には農林水産業の6次産業化、観光、介護などといったいわゆる一般的な地方創生の文脈で理解されるものである。もう一つは、都市という近代空間に埋め込まれた人間存在の不安定さへの反省を前提とした、自然であるとか場所といったものへの再接続といった、いわば存在論的な問いかけである。本稿は、後者を考察の対象とする。

あらためて考えてみると、1960年代からの高度経済成長期以降、合理的・効率的・経済的であることが最優先されるという都市的な価値が全国を覆いつくしつつある。こうした状況に対する存在論的問いかけとして、まずは解剖学者の養老孟司の指摘を参照すべきであろう。養老によれば、人間の脳は人類が住みやすい世界、つまり都市をつくりたがる。また、脳が浸っている時間が長いものほど現実化するのであり、現代人にとって都市こそが現実なのである。その結果、自然の力が人間の力（都市）に比べて弱くなったといえるのである（養老 2015: 76）。

本稿では、こうした現代における都市的なものと自然との関係についての状況把握からはじめ、続いて両者の接続のあり方について地理学（文化地理学）や建築学で行われている最近の議論を参照しながら再検討し、最後に、文学、建築学、映画の知見を参照しながら、これを実践に繋げるべく見通しをつけていくことにする。なお、本稿で言及する自然は、通常連想される自然とは異なっている点にあらかじめ注意を促しておきたい。

1. 都市と自然

都市化した現代社会を存在論的視点から考察したものに、解剖学者・養老孟司の「脳化社会」や建築家・隈研吾の「エンクロージャー」の議論がある。まず養老孟司は、都

市と自然の対比について次のように指摘する。すでに述べたように、人間の脳は人類が住みやすい世界つまり都市をつくりたがる。その結果、自然の力が人間の力（都市）に比べて弱くなった（養老 2015: 76）。これが「脳化社会」である。養老は、こうした都市と自然の対比を、意識と身体という対比で言い換えている。脳化された社会、つまり意識がつくり出した世界に生きているということは、身体性が抑圧されることでもある。「脳化（情報系）」の優位性が高まれば、シーソーゲームのように身体性は低下する。人間は、体調が悪くなり身体は休むことを要求しているにもかかわらず、約束や予定を優先する。つまりは脳の情報を優先して身体はその情報によって制御されている。こうして身体性は抑圧され、失われていくのだという（養老 1998: 249-250）。

隈の「エンクロージャー」は養老孟司の「脳化社会」に近い。隈は次のようにいう。すべてはエンクロージャー（囲い込まれたもの）へと向かっている。すべてはテーマパークに向かっていると言い換えてもよい。これは建築や都市に限定された話ではなく、社会の全体を覆う傾向でもある。綿密に計画され、構築された現実の社会の代用品、それが今日、社会のすべての領域で増殖しつつあるエンクロージャーの本質である。IT によるネットワーク化もまたエンクロージャーである。なぜならネットワーク化され電子テクノロジーによって緊密に接合されているのは、あくまでエンクロージャーの内側で、その外側に対しネットワークは切断され、排他的に作用するからである。ネットワークもまたエンクロージャー型に閉じているのである。そこにネットワーク化という概念の陥穽があるのである（隈 2004: 237-238）。こうした状況把握を行ったうえで、隈は建築の意味について次のような展望を述べる。人間は身体を持っており、場所を媒介として世界とコミュニケーションする。ハイデッガーは、建築は塔か洞窟かという従来の二項対立を斥ける一方で、それはむしろ橋であり、周囲に存在している場所を統合する働きを持つと考えた。そして、周囲に存在するさまざまな自然や歴史を受容し、そこから新しい人間の世界を生成するもの、それが場所なのである。場所は単に体験の対象でなく、生産する「開口部」なのである（隈 2012: 28-30）。

都市と自然についての養老や隈の存在論的な把握に対して、建築家の池田武邦は、より感覚的な表現でもって以下のように説明する。ちなみに、池田は日本の高層建築の草分けである。「今まで一所懸命、室内の温度や湿度を自動的に快適な数値に調整できる仕組みを作ることと相当神経を使っていて、その結果、人間にとって一番快適な室内環境を作ることができたと思っていた。それなのに、ビルの中から吹雪いている外に出た瞬間、気持ちいいと感じたのはなぜなのだろうと。いろいろ考えたり調べたりした結果、人間は1年中快適な人工環境の中に長時間いることで、本来生物として備わっている体温調節機能が弱まって、意識しないうちにストレスがかかって精神がおかしくなるということがわかったんだ。やっぱり人間は自然の一部なんだよ」（建築家・池田武邦（NHK・BS『プレミアムカフェ』2018年4月2日再放送）。

地域創生とは、都市（的なもの）と自然の関係性を本質から問い直すことにほかなら

ない。以下では、その糸口として地理学者のオギュスタン・ベルクの風土性の議論を参照したい。

2. 風土と自然

2-1. 風土とは何か

ベルクの専攻は詳しくいうと現象学的文化地理学である。ベルクは1969年に来日したが、最初の頃は東京・新宿に住んでいたようである。そこから数えて15年目に『風土の日本』を書くわけであるが、その冒頭を次のような文学的な表現でもって書き起している。「15年間の終わりに、早朝窓辺に坐っていると、いくつかのイメージが浮かんできた。(中略) 晩春のある日曜日の午後、妻と私は戸山町のあたりをぶらついてた。まるで田園にでもいるような思いだった。うねうねと曲がる小道、ときおり現れ出る緑、小さな丘、藪で覆われた窪地、切れ切れの空き地……けれどもそこは都市、大都市であった——ひとつの世界であった。そして私たちはいた。けれどもはるか遠くにいた」。都市の真ん中でいきなり自然(公園などでは断じてない)が現れ出たのであり、それは非論理的である種のめまいのようなものだったという。ベルクが意識的に理解しようとしてきた風景とはこのようなものであった。そして15年目になって、彼はこれを問題と呼ぶようになる。問題とは、「ひとつの社会の、自然と空間に対する関係を刻みつける『意味＝方向』(sense)」がどのようなメカニズムでもって発生するのかということである(ベルク 1992: 15-17)。

問題の出発点となっているのが和辻哲郎の『風土』である。『風土』は、人間ないし社会と自然との関係を、人間とそれによって間主観的に構成される社会によって「生きられる自然」という文脈で考察したものである。ベルクは、こうした文脈から世界の風土を類型化した和辻の『風土』が、一面においてかなり底の浅い環境決定論に陥っているとしつつも、こと日本については主体としての人間の存在という観点に立って人間と自然との関係を考察することに成功しているとした(ベルク 1992: 60)。こうした主体と客体のあいだの構築的な関係をもとに、ベルクは「風土」を *milieu* ととらえた。あいだ(mi)にある場所(lieu)、ということである。具体的には、「ある社会の、空間と自然に対する関係」となる。このことに関して、ベルクは「風土」と環境を峻別する。すなわち、「風土」において社会と空間・自然の関係は物理的にして現象的であるのに対し、環境は風土における物理的あるいは事実的次元のみを含んでいる。ベルクは『風土としての地球』の日本語版序文で、「『風土』は人間の主観性をはらみ、だから『環境』と混同することはできない」という和辻哲郎の直感から同書は出発しているとした。環境は客体として研究されうるが、「風土」は主体と客体との間にあるものなのである(ベルク 1994: 2)。

こうした「風土のただなかでは、自然は表象された自然の内部に存在している。表象された自然は社会のなかに投影され、社会は自然のなかに投影される」のである(ベル

ク 1992: 58-59)。そこでのベルクの自然観は独特である。ベルクにとって、もともと自然とは、「この世界において、人間によっても、人間のためにも、意味を持たないもの」、あるいは、「人間を前提としないものであり、それでいて人間の内部に、そして人間の周囲にあるもの」である（ベルク 1992: 155, 1994: 64）。坂部恵の解説によれば、それは通常われわれが理解する意味での自然、すなわち「主体」＝人間にとって鑑賞・脅威・支配などの対象となる「客体」としての自然とちがって、①人間の「内部」にある無意識の欲動や、②人間や文化によって意味づけられた限りでの自然の「周囲にある」不可視かつ「野生」のエネルギーなのである（坂部 1992: 426）。いずれにせよ、意味の空白域としての自然から出発するところにベルクの「風土」の最も重要な意義があるのである。つまり意味の始源に迫ろうとするとところに意味があるのである。

日本の「風土」でいうならば、気象、山水、草木などといった自然を構成する要素は、もともと「それはそれとして」存在するわけであるが、そこに身を置くと精神や観念がふと能動的になるようなことがある。これこそが自然（表象された自然）であり、これは日本の社会（文化を含む）と不可分の関係を持つ。

2-2. 風土性＝おもむき

前述のように、「風土」は「ある社会の、空間と自然とに対する関係」のことであるが、それは、物理的なものだけに還元することはできない。その関係は、同時に現象的でもある。すなわち、「それは社会によって感知され、解釈され、調整されない限り存在しえないし、また逆も同様に、この社会的なものの要素が自然の出来事と結び付いた物理的な結果の形をとって絶えずあらわされるのでない限り、やはり存在しえない」のである（ベルク 1994: 40）。こうした主観的でなおかつ客観的、物理的にして現象的、生態学的にして象徴的な関係性は動態的であり、よって歴史的である。ベルクは、こうした意味での歴史的な統合過程を「通態化 (trajection)」と呼ぶ（ベルク 1994: 58-59）。そしてこの「通態化」の過程は、ひとつの方向に進んでいくとし（「風土の客観的な進化」）、これに「風土性」の用語をあてた（ベルク 1994: 40）。ベルクは、「風土性」とは「風土」の「おもむき」であるともいう。いうまでもなく、ここでの「おも」は顔のことであり、顔がある方向に向いているということである。先に述べた 15 年目に提起された問題、すなわち「ひとつの社会の、自然と空間に対する関係を刻みつける『意味＝方向』(sense)」とは、まさにこの「おもむき」のことであった。

3. 自然は失われたか

それでは、冒頭で述べた都市的なものの自然に対する優位という現代的状況を、たった今述べた「おもむき」の文脈のなかでいかに説明しうるのだろうか。この点について、ベルクは『風土の日本』の第 5 章「自然の現れ出る裂け目」のなかで、戦後の日本で現

れたひとつのパラドックスに言及する。長いこと自然の美を謳い、「風土」のちょっとした変化にも敏感に反応してきた日本が、なぜ戦後の高度経済成長期以降に環境問題を深刻化させたのかというパラドックスである。もっとも、一方で自然を賛美し、他方では荒廃させるという矛盾については、いくつかの説明がすでになされている。唐木順三は人心の荒廃をその原因とし、鶴見俊輔らは、伝統的な自然理解や自然感情がそもそも未熟で形式主義的であり、かくも繊細に謳われた自然は、環境の真の現実から遊離して幾世紀にもわたって仕上げられた架空の産物なのであったと言い切った（ベルク 1992: 261-263）。

ベルクは、こうした従来の説明では、「あるひとつの社会が、それ自身に固有の文化が選択したものを、これほど荒っぽく、そして明白な形で否定できたのはなぜか」ということの答えにはなっていないという。同じひとつの社会が、数十年の間に指向対象を全面的に変えるということはあるにない、つまり主体である文化が、同様に主体である自然をことごとく否定して単なる客体対象としての役割に引き下ろすことはありえないとしたうえで、その答えは日本の社会の自然に対する関係、つまり「風土」のなかにこそ求めるべきであるとベルクは主張する。そして、そうした根源的な原因が、目に見える原因あるいは直接的な原因を作用させてしまったのだと説明する（ベルク 1992: 265-267）。

ここでいう固有の文化が選択した指向対象とは結局いかなるものなのであろうか。ベルクは、西洋の *nature*、中国の自然（ズラン）との比較という手続きによって、日本における自然概念の系譜と特徴を概略したうえで、次のように説明する。自然的なるものに対して日本人が伝統的に行ってきた概念形成は、基調的には情緒性のもとでなされた、すなわち心（心情、感情）の高揚と倫理的・美的観点から自然の価値づけがなされた。そこでは、自然が本質的に善なるものであって拒否することができず、同時に根本的に自己と区別できないものとされた。よって、日本文化は、自然に対して正面から対峙することは決してなかった。実際はそれどころか、自然を最高の指向対象に、さらには到達点に達するという方向に徹底して傾斜していたのである（ベルク 1992: 229）。一言でいえば、自然との調和ということになる。この調和は、人間による自然支配（西洋文化が選択したもの）や、自然に対する人間の従属（一般に日本論はインドを例に挙げる）に対比される。「通態」的視点によれば、主体としての日本文化が主体としての自然を認識したことを意味するのであり、両者はいわば同格で同じ平面にあるのである。それに対して、支配は真の主体が文化であることを意味し、従属は真の主体が自然であることを意味する（ベルク 1992: 268）。

それでは、ベルクがいうこうした「通態」的視点あるいは「風土性」の視点は、高度成長期以降の急激な自然破壊をいかに説明するのだろうか。説明にあたっては、以下の1970年4月13日『朝日新聞』の社説が例として挙げられる。「おそらく日本は、あまりにもゆたかな自然にめぐまれ過ぎたのかもしれない。われわれはそれに甘えて、自然に

暴虐のかぎりをつくしてきた。だがもうそれは許されない。日本の自然は、その人情とともに、まさに荒れはてようとしている」。「社説」は、「日本文化が永遠のパートナーを失いつつあり、途方に暮れている」状況を示しているとともに、人為によってここまで自然を痛めつけておきながら、それでも過ちを許してくれる自然の寛大さへの敬意を素朴に示しているとベルクはいう。ここにみられる「自然に甘えて」の表現であるが、自然と文化が同様に主体で、同じ平面上に存在するという発想がその背景にあるのであり、西洋人からすれば、こうした自然の擬人化は日本人の未開性のあらわれだという評価になるのである（ベルク 1992: 268-269）。

「社説」は、突如として現れた日本の狼狽ぶりを表現している。日本の高度成長はあまりに急すぎた。もともと日本において、自然は「おのずからしかり」という性格を持ち、人間にはそれを斥ける資格がない。自然の根拠をそのようなものとして認め、その根拠と妥協せねばならないのである。それに対し、西洋ではロゴスという唯一絶対の根拠しかないため、自然をあたかも物を扱うかのように自然を意のままに操る。ところが、戦後の日本は物質界を操作可能な物の集まりに事実上還元してしまうような技術的手段を一举に10倍にして手に入れてしまったために、そのことの論理的帰結を引き出す十分な余裕がなかったのである（ベルク 1992: 270）。狼狽の原因はそこにある。

それでは、長らく主体として認識されてきた自然は本当に失われてしまったのであろうか。答えは、一面において失われたが、もう一面においては失われていないということになる。以下、日本の「風土性」＝「おもむき」のもとで形成されてきた自然概念の構成を明瞭にすることによってこのことを考えてみる。

4. 風土性のなかの自然

4-1. 創造的偶発性＝もう一つの自然

前節で、日本では、西洋と異なって自然と文化が同格で同じ平面上にあることをみた。ここでの自然は、人間を取り巻く自然（風景）と人間の内部で働く自然（欲動）の双方を含んでいる。そして日本文化は、このような外なる自然と内なる自然の秩序を、ひとつの主体を他の主体に挿入しうるような「裂け目」をしつらえることにより調和させることができたとベルクはいう。少々難解な表現であるが、それは次のようなことである。文化（ベルクは造園をその例に挙げる）は主体として地表に組み込まれ、そこから自然が主体としてほとばしり出る。その「裂け目」から現れる自然は、純粹に野生のものではなく、作為でもって構築されたものになる（ベルク 1992: 240-241）。日本において、造園術こそが「人間を自然に導き、そして通態的に人間を通じて自然に語らせようとする欲動をもっとも明確に表現してきた」のである。ベルクはこの造園術における「通態性」を考察するにあたって、平安時代の貴族である橘俊綱の『作庭記』を参照する。日本で造園術を体系化した最初の記述とされる『作庭記』では、作庭の制約として、もともと

の起状、池の形、島と築山の形、野筋、石の配置の様式の順で並べられており、そこではもっとも自然なものからもっとも人手が加わったもの、すなわち自然から文化へという連続性が認められる。こうした一連の過程の最後の部分、すなわち石の配置の様式が重要なもっとも部分であり、作庭は「石を立てる」とも表現される。「石を立てる」にあたっては、人間（造園家）は自然のままの石を直に、中間項を介さずに知覚する。そのためには造園家が自分を捨てて従属するのではなく、積極的な自己同一化が行われなければならない。主体性のないところからは、自然とのなれあい、因襲しか生まれないのである。すなわち、主体の客体への投影のみならず、二つの主体の同時存在が必要とされるのである（ベルク 1992: 250-251）。こうして「立てられた石」によって自然が立ち現れるわけであるが、このいわば創造的偶発性は、ある程度まで人間によって客体化しうるものであり、したがって人間はこれを体系化し、再生産しようとする（ベルク 1992: 255）。ここには、自然を表象し、その理想化された本質をもとの場所（本物の風景）とは別の場所に移そうという日本人の並外れた趣味と能力が表れている。つまり、日本人はある場所に向き合ってもあまり臨在感を感じず、むしろ事物を前にして強い臨在感を覚えるという側面を示している。つまり、自然の表象という便法を用いて、作り物以上のものを感じるのである（ベルク 1992: 328）。

ベルクは、こうした自然の偶発性を体系化しようとした造園家のもう一人の例として、戦国時代から江戸時代初期にかけての茶人・古田織部を挙げる。織部は、茶碗をわずかに変形させて不完全感を出す手法や、造園に切石（人為的に切断した石）を使うことをはじめて試みたことで知られている。織部は、露地の樹木を人為的に変えることを禁じるなど自然を重んじる一方で、灯籠を斜めに置いたり、石や落ち葉の色を変えるなどの人為的な装飾を多用した。織部の美学は、人為が自然よりも自然的となること、すなわち自然のメカニズムを客観的に作り出すことを目指していたといえる。これは文化の極みにきわめて近い位置にあるものといえる（ベルク 1992: 257-258）。

この傾向を体現しているのが、不規則な直線と曲線を配置した、京都にある茶道家元藪内家の燕庵（えんあん）の名高い延段である。この延段は、自然のままの小さな石と三方を直角に切った長い板石で構成されている。織部はそこで屈託なげに直線と曲線を組み合わせており、そのことは自然の秩序に対する畏敬の念の欠如のあらわれである。一方で、文化の秩序についても同じような態度がみられる。すなわち、文化の秩序に従えば、自然石であれ、切石であれ、一層の統一と規則性に向かうはずであるが、そうはなっていない。「二種類の組石の様式が共=存在し、二つの秩序のどちらの達成をも否定していることから、通常の意味が裂けているかのような効果が生じる」のであり、実際、大きな石の不規則な形の縁は、「裂け目」のように見えるのである（ベルク 1992: 258-259）。要約するならば、織部が自然の偶然性を体系化しようすると、文化にまさしく「裂け目」を生じさせ、そこを通じて自然が生み出されるのである。燕庵の延段では、何かが自ずと生じている。それは、外在的な秩序を乱す何かであり、これが自然の定義にほ

かならないのである（ベルク 1992: 259）。

4-2. 根源的自発性

精神病理学者の木村敏がいう「契機」は、この「裂け目」に相当するだろう。日本人の自然を説明するにあたって、木村も庭園を例にとる。木村は西洋（イギリス）の庭園が自然に対して「写實的」であるとするならば、日本の庭園は「表意的」であると述べたうえで次のように説明する。西洋の自然が人間一般に対して外在的実在であるのに対して、日本の自然は、心の一種の緊張状態においてそれを自然として感じるとる個人を必要とし、人間一般の外にあるのではなくて一人一人の個人の心の内にある。これは、ベルクのいう「外なる自然と内なる自然の秩序」に通ずる。そして木村は、「自己がその心の動きを、張りつめた集中性において、しかもそれでいながら一切の束縛を離れたありのままの自発性において感じとっているという事態」が自然なのである。その際に、そのような事態を出現させる「契機」となるような事物の存在が欠かせないのである（木村 2008: 26-27）。

ベルクは燕庵の延段（＝事物）に設えられた「裂け目」を通じて自然が生み出されるといったわけだが、木村はこの生み出される自然に一步踏み込んで説明を加えている。すなわち、自然は「自そのまま」の意味であり、自が自としてのあるがままの姿にある、あるいは自が自としてそれ自身を示しているということの意味している。そしてこの「自」とは何かといえば、主体からみて向こう側（相手側）に仮託するならば「おのずから」になり、こちら側に引き受けていうならば「みずから」となるような、そういう向こう側とこちら側が未分化である両者の「あいだ」に生じているような、何かある「根源からの純粋に自然発生的な湧出」とでもいうべきものである（木村 2008: 26-27）。つまり、「おのずから」湧き出ている「根源的自発性」のようなものに生命的に関与して、これを「みずから」の存在根拠として感じとっている状態がまさしく自然なのである（木村 2008: 40）。

5. あらためて地域創生と自然について

5-1. 都市のなかの裂け目

これまで、「裂け目」を通じた（象徴的）自然の創発というテーマについて、造園術という文化活動のなかの一領域を象徴としながら検討した。これまでのやや抽象的な議論を、地域創生の実践の場に落とし込むための道筋を探るべく、以下では文学、建築学、映画などの議論を参照することにする。

まず、都市をすぐれて文化的あるいは人為的な秩序と捉えることが可能であるが（養老孟司の「脳化社会」や隈研吾の「エンクロージャー」もそうである）、その都市のなかにかすかに「裂け目」の痕跡を見い出すことができることはベルクも指摘している。す

なわち、多くの日本の町の、「橋の近く、道の交わる場所、分岐するところのかたわら、あるいは坂の側に、稲荷や地蔵、道祖神などの守護神に捧げられた小さな祭壇が見出される」し、「時としてこの境界域は本格的な神社や寺が設置されるだけの広さがあり、大木に囲まれ、多くは傾斜地の近くに位置して」おり、(象徴的) 自然に向かって開いている (ベルク 1992: 324-325)。これらはすべて「裂け目」としての役割を今でも持ち続けている文化的な仕掛けである。

ベルクの『風土の日本』(単行本) が出たのは 1988 年であるが、それから 30 年余りを経た現在にあっても、日本社会の底流にある自然観や「おもむき」に大きな変化はないようにみえる。映画の世界がそうだ。たとえば新海誠の映画には神社がよく登場する。2019 年に公開された『天気の子』の最初の部分で、ビルの屋上にある神社が登場する。異常気象を扱ったこの映画は、地上 (例えばビル) とその上に広がる空 (天) という上下の軸でもって物語が展開するのだが、両者のいわば「裂け目」にあっては、媒介者としての役目を果たす神社と晴れ女の超能力を持つ陽菜の存在が重要で、いわば空 (天) へと繋がる「開口部」となっているのである。その部分を小説版によって紹介しよう。「雲間からの光は、その鳥居をまっすぐに照らしている。鳥居の朱色が、陽射しのスポットライトの中で雨粒と一緒にきらきらと輝いていた。雨に濁った世界の中で、そこだけが鮮やかだった。ゆっくりと、彼女は鳥居に向かって屋上を歩いた。(中略) 鳥居を抜けると、ふいに空気が変わった。雨の音がぷつりと途切れた。目を開くと、そこは青空の真ん中だった」(新海 2019: 11-13)。

一方、都市では神社などの歴史的な文化的仕掛け以外に、地形や建物などが「裂け目」の役割を果たしうる。たとえば、わずかながらも残っている原っぱや隅っこがそうである。「原風景」という用語を最初に使ったとされる奥野建男の『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想』は、都会の原っぱや隅っこにこの「裂け目」を見い出しているのだともいえる (奥野 1972)。「” 原っぱ ” で子供たちはなにををして遊ぶか。蟬やとんぼはじめ、いろんな虫を採る。みみずを掘る。石や金具やかわらけを集める。どんぐりや椎の実を拾い、木に登り、雑草をひっこ抜き…」大人になってから原っぱを目にすると、こうした子どもの頃の記憶が蘇り、もう一つの自然がほとばしり出るきっかけともなるのである。

映画の場合はどうか。新海誠の『天気の子』に何度か出てくる田端駅南口の不動坂もいってみれば「裂け目」である。人気のない南口の自動改札を出ると、まっすぐな細い坂道が続いている。右手には緑に茂った桜の木が並び、左手の眼下には山手線や新幹線の高架など何本もの線路が伸び、その奥にはビル群が広がる。晴れ女の超能力を持つ陽菜のアパートは坂の上にあった (新海 2019: 90-91)。その後、異常気象が続いた東京ではその一部が水没する。田端駅周辺も水没した。船でかつての田端駅付近に降り立った穂高は、何度も歩いた坂道を上がる。右手は五分咲きの桜が並んでいるが、左手は水没した都市が広がり、水面から新幹線の高架が長い栈橋のように伸びている。坂の上にはあいかわらずあのアパートがあったが、陽菜は晴れ女の超能力を失っているの

である（新海 2019: 288-292）。坂道は天と地を分かち「裂け目」であり、その先に住む陽菜は天（気）と人をつなぐ媒介者であった。最終的に、陽菜は命と引き換えに晴れ女の超能力を失い、結果、東京は水没することにはなるのだが。

建築学も都市のなかの「裂け目」の存在に敏感な分野である。建築家の中井祐は以下のように表現する。「一步路地にふみこんだときの、いけないところに入りこんだかのような感覚。ひとしきり歩きまわったあとに突如眺めのよい開けた場所に出たときの、生き返ったかのような解放感」。中井によれば、日本のおおかたの町の場合、その空気感を生み出している基盤は繊細で変化に富む地形、水や緑なのだという。これらは、通奏低音のように時を経て変わらぬ空間の性格の根源を規定する。さらに、すりへってつるつるになったペーヴメントの光り具合や、年輪を刻んだ並木の風格、風雨に洗われた建物の外壁の色合いや手触りなど、時間の奥行きを感じさせる要素が積み重なって、その場所固有の質感に厚みを加えていく。つまり、空間を計画・デザインする際には、地形や水、巨木老木、時間の染みついた佇まいをまとう建物や道端の「しつらえ」などを大切に考える必要があるのである。このしつらえは体験の「母体」となるともいっている（中井 2013）。中井のいう「しつらえ」や「母体」は、本稿でいう「裂け目」に相当する。同じ建築学の隈研吾の表現を用いれば、「開口部」ということになるだろうか。隈の「開口部」についてはすでにふれた。

5-2. 流れと広がり

ここまで、都市（町）における「裂け目」の存在の意味についてみてきた。「裂け目」に相当するものとして、「開口部」、「契機」、「しつらえ」、「母体」などといった表現を用いる例があることも述べた。しかし、都市（町）の自然への再接続を考えるのあたっては、「裂け目」の存在を指摘するだけでは十分ではない。「裂け目」を一連のプロセスのなかに位置付ける必要がある。一連のプロセスとは、「裂け目」までを水路付けする「流れ」と、「裂け目」からほとぼり出る自然の「広がり」である。それは、「裂け目」を真ん中にして、時間的「流れ」と空間的「広がり」が自覚されるというイメージである。

まず、「流れ」について。ベルクの「通態性」からのアナロジーになるが、外界の流れと心のなかの流れの両方をここではみておく必要がある。外界の流れについては前項で言及した「坂」などが想定される。心のなかの流れについては、若干の説明が必要だろう。仏教学者の鈴木大拙は、心があることにとどまることは心の安息にとって大きな障害となると言っている（鈴木・フロム他 1992）。また沢庵和尚は『不動智神妙録』のなかで次のように言っている。「仏法にては、この止まりて物に心の残ることを嫌い申し候。故に止まるを煩惱と申し候」。「心は万境に随って転じ、転処実に能く幽なり。流れに随って性を認得せば、喜も無く復た憂も無し」（沢庵 2011）。また、柳生但馬守宗矩は『活人剣』の中で「およそ病とは、心のとどまるをいふなり」と言っている。日常的に心のなかで渦巻く怒り、不安、欲などの感情に支配されることなくうまく受け流すには、それらを

いったん外在化して拘束から自由になる必要がある。そのきっかけが坂などの存在である。よって、外界の流れと心のなかの流れは互いに分かつことなく結び付けて考える必要があるだろう。

次に、「広がり」について。ここでは文学や映画のイメージの助けを借りることにしよう。まずは、作家・村上春樹のマラソンのゴールでのイメージである。いうまでもなく、ゴールが「裂け目」である。「細かい判断みたいなことはあとにまわし、そこにあるものをあるがままに受け入れ、それとともにとりあえず生きていくしかないわけだ。ちょうど空や雲や川に対するのと同じように。そのような（老いた）自分の姿を、言うならば自然の光景の一部として、あるがままに受け入れていくしかない」。さらに続けていう。「僕は僕であって、そして僕ではない。そんな気がした。それはとても物静かなしんとした気持ちだった。意識なんてそんなにたいしたものではないのだ」（村上 2010: 172-174）。「意識なんてそんなにたいしたものではない」については、冒頭で挙げた養老孟司の意識と身体との対比を想起したい。

もう一つ、新海誠の『天気の子』を挙げよう。すなわち、六本木ヒルズの屋上スカイデッキ（文化的・都市的装置）で陽菜が晴れの願いを空に届ける時の描写は、ある意味、伝統的な日本人の自然観を現代に伝えている。それは以下のようなものである。「眼下の地上は薄いもやに覆われていて、そこから突き出たビル群はまるで海面から伸びた古代の柱にようだ。（中略）しだいに、不思議な一体感が全身に満ちてくる。私の境界が世界に溶け出していく。自分は風であり水であり、雨は思考であり心である。私は祈りであり木霊であり、私は私を囲む空気である。奇妙な幸せと切なさが全身に広がっていく。そしてゆっくりと、私には声が届きはじめる。ことばになる以前の、空気の震えのようなもの」（新海 2019: 122-123）。ここでは、「私の境界が世界に溶け出していく」が「広がり」ということであり、とくに「裂け目」を「空気の震え」と表現しているところに注目したい。

本稿では、現代における都市的なものと自然との関係を問い直し、その再接続をどう考えるかについてみてきた。しかし、再接続の実践については、まだまだ抽象的な段階にとどまっている。より具体的な議論については稿をあらためることにしたい。

引用文献

- 奥野建男 (1972), 『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想』 集英社.
木村敏 (2008), 『自分ということ』 ちくま学芸文庫.
隈研吾 (2004), 『負ける建築』 岩波現代文庫.
坂部恵 (1992), 「文庫版解説」, オギュスタン・ベルク 『風土の日本』 ちくま学芸文庫.
新海誠 (2019), 『天気の子』 角川文庫.
鈴木大拙・エーリッヒ・フロム他 (1992), 『禅と精神分析』 東京創元社.
沢庵 (2011), 『不動智神妙録』 たちばな出版.
中井祐 (2013), 「町の同一性と場所の履歴」 『Magazine』 7月20日発行.

ベルク , オギュスタン (1992), 『風土の日本』 ちくま学芸文庫 .

ベルク , オギュスタン (1994), 『風土としての地球』 筑摩書房 .

村上春樹 (2010), 『走ることについて語るときに僕が語ること』 文春文庫 .

養老孟司 (1998), 『唯脳論』 ちくま学芸文庫 .

養老孟司 (2015), 『養老孟司の幸福論—まち、ときどき森』 中公文庫 .

Rethinking Regional Revitalization in Relation to ‘Nature’

Masato KAWAMORI

This study aimed at exploring why regional revitalization is important now and what is it in the first place. In general, there are two approaches toward regional revitalization. One is the policy and practical response to the overconcentration of population and economic activities in Tokyo and the accompanying shrinking society of rural areas. The other is an ontological response, implying reconnection to "nature" or "place" on the premise of reflecting on the instability of human existence embedded in the modern space of "city." This study considered the latter. The paper first discusses the situation about the relationship between "urban" things and "nature" in modern times and then presents the connection between the two with reference to recent discussions in geography (cultural geography) and architecture. Finally, we will make a prospect to put this into practice with reference to the knowledge of literature, architecture, and film. Importantly, the nature mentioned in this paper is different from the nature usually associated with it.